

災害フェーズに対応した不安の中医治療

加島雅之

熊本赤十字病院総合内科、総合診療科

今回、熊本では震度7という最大震度を36時間以内に2回経験するというかつてない災害を受けた。また、その後も4000回を超える余震に見舞われた。地震災害では発災からの時期により状況が変化し、医療ニードも変化することが知られている。中医学の応用される状況も同様に時期により変化するとともに、同じ症状でも時期によって証の変化が観察された。特に今回の熊本地震による災害の特徴は、短時間のうちに2回のひどい揺れを経験したことによる恐怖、不安であった。このため、自宅内での就寝を避け、多数の車中泊で夜を過ごす人々が現れた。度重なる余震により呼び覚まされる恐怖感と心身の疲労により不安障害・不眠を呈する患者が多数現れた。西洋医学の抗不安薬としてSSRIは初期の消化器症状や倦怠感の出現で内服を嫌がられる場合が多く、ベンゾジアゼピン系薬剤は依存性と高齢者におけるせん妄を引き起こすリスクで使用しづらかった。また、西洋医学の眠剤は夜間に地震が起きたときに覚醒して逃げることが出来ないのではないかとう不安感を訴え内服を拒否する患者も多く認められた。

このような状況で中医学的治療は効果を示すことができた。特に発災から1カ月以内の急性期では、急性期の対応による疲労と車中泊などによる休養不足が重なり、津液・陽気の不足を背景とした不安・不眠・焦燥感があり、柴胡桂枝乾姜湯を使用し奏功した。普段単純性の不眠にはなかなか効果が得られない酸棗仁湯も、虚勞に伴う不眠として、この時期に使用すると良好な効果が認められた。その後、3カ月後頃から疲労がピークに達したのか、心血虚と気虚を合併した症例が増え始め、加味帰脾湯を使用することが多くなっていった。また、半年を過ぎたことより、焦燥感を伴う不安障害が増加し、肝火凌心として柴胡加竜骨牡蛎湯、さらに背景に虚勞があるとみて、酸棗仁湯の併用を行う症例が多くなっていった。このような災害後のフェーズによる変化をとらえたきめ細かい治療ができること、また症状として全面に出現していなくても病態を予想して対応することが出来ることが中医学的治療の利点と考えられる。